

戦争について私たちが知っている二、三の事柄

－「総合プルーフ」における平和学習－

ささかわ ひろし
笹川 裕史

抄録：平和学習の一環として、戦争について知る／考える授業を行なった。授業では、映像の視聴と意見交換・巡検・読書とその書物の紹介など多様な活動を実施した。また生徒一人ひとりの関心に基づいた研究をグループ活動に反映させるようにした。このことにより、生徒たちは自由度が高い活動が保障されていると感じ、学習に対して積極的に取り組み、また今回の平和学習を高く評価してくれた。本稿は、戦争に対する多様なアプローチを通じて戦争の多面性を生徒に意識させた平和学習の記録である。

キーワード：大阪市内の戦跡巡り、授業実践、戦争、戦争映画、総合的な学習、読書紹介、平和学習

1. はじめに

本校で「総合プルーフ」とよばれる科目は、2年次に開講される「課題研究・総合」のことである。当該科目は、1年次で学習した「課題研究・基礎」をベースにして、グループで課題研究に取り組み、さらにその成果について理解しやすく説得力のあるプレゼンテーションを行なうことを目指している。2021年度の総合プルーフを担当した筆者は「戦争と平和」をテーマとする講座を開講した。そのきっかけとなったのは、2019年度の「ピースプロジェクト」とのかかわりであった。

「ピースプロジェクト」とは、アメリカ合衆国の姉妹校であるASMSA（アーカンソー州立数理芸術高等学校）の生徒と本校の生徒が「平和」に関する知識や体験を共有し、相互理解を深めていく活動である。たとえば2019年10月に来日したASMSAの生徒と本校の生徒が8つのグループに分かれて対話をしている。彼らとの対話は本校の生徒にとって貴重な経験であったが、次のような点も指摘されている。

……生徒たちは、「平和」や「戦争」に対する個人の価値観を他者に十分に「語る」ことが十分にできなかったととらえている。その理由としては、①事前学習の不十分さから、自分の歴史観を客観化（言語化）する作業ができないままに対話することになってしまったこと、②「平和」や「戦争」という概念は歴史から学び取るべき知識とされていて、自分自身の言葉として現在に語りかける価値観として学習しきれていなかったことがあげられるだろう^(註1)。

このような問題点への取り組みとして、筆者は、通常の世界史の授業では実践が困難な平和学習を2021年度の「総合プルーフ」という場で試みようと考えた。本稿はその記録である。

2. 開講まで

5月13日の「総合プルーフ」のオリエンテーションで筆者は以下のような要項を示した。

笹川講座 「戦争について私たちが知っている二、三の事柄」（物理講義室・新館S2）^(註2)

* 目的…平和を考える前提として戦争の実態や表象、戦争をめぐる思想などについて考える。

* 方法…読書や映像体験、エクササイズに基づいた討論・調査・研究。

* 受講条件 ①（毎回ではないですが）5時頃までの時間拘束に対応できること。

②校外でのエクササイズの場合は、交通費は自己負担となります^(註3)。

筆者は、本講座の目的を明確にするため、あえて「平和」という言葉を講座名に用いなかった。2020年度の「ピースプロジェクト」参加生徒が、ノルウェーの社会学者ヨハン＝ガルトゥングの考えに影響を受け、「消極的平和」よりも「積極的平和」を重視したことに違和感があったからである。「消極的平和」とは戦争などの直接的な暴力のない状態をさし、「積極的平和」とは戦争の原因となる貧困・抑圧・差別などの構造的暴力のない状態をさす。現代の日本で生活をする生徒にとって、貧困・格差・差別問題の方が戦争よりも

身近であり、さらに「積極的平和」という言葉の好感度から、「戦争」以外に関心が向くのかも知れない。しかし平和学習は、まず戦争について知ることから始めなければならない—と筆者は考えたのである。

学習方法として筆者が示したものは、平和学習としては、ごく一般的かもしれないが、ふだん講義中心の授業をしている筆者にとっては、清水の舞台から飛び降りた気分であった。

2021年度の「総合プルーフ」は7つの講座が開講された。受講生119人のうち笹川講座の希望者は、第1希望10人・第2希望16人・第3希望14人・第4希望17人の計57人だった。希望調査をもとに各講座の受講者数をできるだけ等しくなるように調整した結果、笹川講座に確定した受講者は、第1希望8人・第2希望8人の計16人（男子7人・女子9人）となった。筆者の講座を希望した理由は、「校外での見学や討論など、様々な活動が出来るそうだから」と「戦争について、詳しく知りたいから」がほぼ半数であった。

3.1 学期（第1回～第3回）

（1）第1回（5月27日／15人出席）…第1次世界大戦について知る & 班分けの発表

まず戦争について知ること—これが本講座の出発点であった。ではどのような戦争を生徒に紹介するのか。筆者は、古代から現代までの戦争の歴史を説明する気はなかったし、彼らが知りたいのは前近代ではなく近現代の戦争だろうと考えた。そこで初回の授業では第一次世界大戦を扱ったNHK特集「映像の世紀・第2集『大量殺戮の完成』」を視聴させた^(註4)。またその際に[参考資料1]を生徒に配布した^(註5)。

視聴後、筆者は次の3点について注意をうながした。まず戦場の映像の多くが各国政府の検閲を受けており、総力戦を遂行するためのプロパガンダとして不適切なものは上映が禁止されたこと。ついで同じ映像が、戦争を継続するための戦意高揚に利用される場合もあれば、逆に戦争の悲惨さを強調し反戦平和を訴える場合もあるということ。最後に、映像はあくまでも現実の一部を映しとったものでしかない…したがってその映像が撮影・上映された状況や、その背後にある事実を探ることが大切であること。

授業では、受講生16人の班分け(各班4人)も発表した。生徒自身による班分け、あるいは抽選も考えたが、結局、筆者が決めた。生徒たちに任せた結果、いわゆる仲良しグループとその他みたいな班構成になるのを避けたかったこと、また各班の男女数と所属クラスをなるべく均等にしたいことが理由である。

授業後の課題（15人提出）^(註6)

…… [参考資料1] のQ4・Q16・Q24・Q27・Q29・Q38・Q40についてグーグルクラスルームで回答すること。それぞれ100字以内でまとめてください。

（2）第2回（6月24日／15人出席）…戦争をめぐる討論 & 個人研究テーマの決定

前回視聴した『大量殺戮の完成』の生徒の感想（○囲みの数字）を紹介しつつ、コメントをした。そして6つのテーマについての班単位での討論（意見交換）をさせた（1テーマにつき約10分）。本稿では、生徒に配布した資料プリントの一部要約と授業の概要を記しておく^(註7)。

【『大量殺戮の完成』の最初の感想】

- ①この第一次世界大戦を経て、世界は良くも悪くも大きく変わり、それに伴い技術も向上したり、多くの犠牲を出しながらも現在の様々な技術につながっているのだと思いました。
- ②この時の若者から見た戦争が荒々しくロマンチックな冒険ととらえていたのに驚いた。当時は約50年間戦争がなかったため、戦争に対する意識が甘かったのかもしれないが、現代でも約80年くらい日本では行われていないのに、我々日本人の戦争に対する意識は当時と比べものにならないだろう。
- ③日本やアメリカが軍需景気で大儲けした…やはり戦争は科学や経済を発展させるものなのだなと思った。
⇒〈討論1：戦争による「進歩」で、戦争は免罪されるか？〉

上記の①と③、後述のQ40の④のような「戦争には、科学技術の進歩をうながす良い面もある」という意見について討論をさせた。人間は、公平であろうとしたとき、どのようなものごとにも肯定面と否定面を探そうとする。しかし戦争に関しても同様な態度をとるべきだろうか。筆者は「戦争によって開発された技術等は、戦争が無くてもいつかは開発された可能性がある。だから戦争にも良い面があるという考え方はしたくない」とコメントをした。生徒たちの多くも筆者の意見には肯定的であった。

[参考資料 1]

【ヨーロッパ列強の皇帝達】

Q 1 : 20 世紀初頭のヨーロッパ列強の植民地が地球上に占めた割合は？ A : 5 分の 4

【出征する各国の兵士達】

Q 2 : 開戦 1 か月後で、ヨーロッパだけで何万人が戦争に動員されたか？

A : 独 : 宣戦布告時…450 万人 英 : 志願で新たに 50 万人 欧州全体 : 1 か月で 1000 万人

Q 3 : ヨーロッパは戦争からどれくらいの年数、戦争から遠ざかっていたか？ 兵士たちの戦争観は？

A : 50 年 荒々しい冒険

Q 4 : ドイツ兵士の手紙…「こういう時に自分のことや家族のことを考えると小さく弱くなります。国民や祖国のことを考えると強くなれるのです」 → なぜだろう？

Q 5 : 開戦当初、政府や兵士は、いつまでに戦争が終わると思っていたか？ A : 数週間、クリスマスまで

【第一次大戦を記録したフィルム】

Q 6 : フランス陸軍資料部のフィルム保管庫が作られた目的は？（第一次世界大戦は約 1000 巻、150 時間）

A : 第一次世界大戦を契機として戦争の記録と宣伝のために作られた

【機関銃の出現】

Q 7 : 開戦数か月後に兵士の「帽子」はどのように変わったか？ 理由は？

A : 皮革に布を被せた帽子から鉄のヘルメットに 大砲や機関銃の破片から頭部を守るため

【植民地から動員された兵士達】

Q 8 : 植民地各所から、どれほどの数の兵士がヨーロッパに動員されたか？

A : 仏印から仏に 15 万人 英軍の 1 / 4 は、本国以外の人々 植民地兵は、全体で 300 万人以上 中国人労働者…砲弾の運搬など危険な仕事。給料は中国の数倍。約 10 万人

【戦時下のパリ】

Q 9 : 運搬や移動手段として馬にとってかわったものは何か？

A : ルノータクシー 600 台がパリを守った。イギリスの二階建てバスも利用された

Q 10 : フランスでは準備した砲弾の半分が 1 か月で使用され、弾薬の製造が急がれた。労働時間はどうなったか？

A : 勤務時間を長くするため夏時間が作られた

【女性兵士の出現】

Q 11 : 戦時中の女性の役割は？ 戦後、女性の社会的地位はどうなったか？

A : 電車の運転手や土木作業員、女性兵士など。戦後の参政権獲得につながる

【塹壕の戦い】

Q 12 : なぜ、腕時計が兵士に必要となったのか？ A : 一斉行動が必要となったから

Q 13 : 塹壕の長さは？ A : 西部戦線ではスイスから北海まで 700 km

Q 14 : 塹壕の兵士が雨を嫌った理由は？ A : 泥まみれで体が冷え、塹壕足（一種の凍傷と水虫）となるから

Q 15 : 塹壕内部を撮影した未編集のフィルムには、何が写っていたか？

A : 兵士が撃たれて崩れ落ちる瞬間 鳴り響く砲弾に萎縮してうずくまる兵士

Q 16 : 死体の撮影が禁止されていたのに、ある将校が撮影した。 → なぜだろう？

【ファイサル 1 世とアラビアのロレンス】

Q 17 : パレスチナはどの国の領土だったか？ 「アラブ独立の英雄」とされたイギリス人は誰か？

A : トルコ（オスマン帝国） T. H. ロレンス（アラビアのロレンス）

【大英帝国の植民地インドとガンディー】

Q 18 : 「イギリスの危機をインドのチャンスに変えてはいけない」と言った人物は誰か？ なぜそう言ったのか？

A : ガンディー 戦後、イギリスから正々堂々と独立できると信じていたから

【アメリカの経済発展とハリウッド映画の活況】【ハリウッドにきたチャップリン】

Q 19 : 戦争当初、アメリカの経済状況はどうであったか？

A : イギリスやフランスへの生活用品・軍需品の大量輸出で貿易額が急上昇

【大正天皇即位の大礼】【日本、中国出兵】【戦争景気に沸く日本】

Q 20 : 開戦当初の日本軍の軍事行動として何が描かれていたか？

A : ドイツの利権獲得のため中国の青島に出兵。日英同盟の協力を求められての艦隊の地中海派遣

【西部戦線】【毒ガスの開発】【カモフラージュ部隊】

Q 21 : ドイツ軍がはじめて毒ガスを実践で使用したのはいつか？

A : 1915 年 4 月 22 日。120 t の塩素ガスで 5000 人の死傷者

Q 22 : 科学者が、戦争での毒物使用禁止を知っていたのに毒ガス開発に携わった理由は？

A : 毒ガスがあれば、何よりも戦争をはやく終わらせることが出来る考えたため

【戦車の登場】

Q 23：塹壕戦を制するために開発された決定的な武器とは何か？ その開発を推進した人物は誰か？

A：タンク（戦車） イギリスの海軍大臣W＝チャーチル

Q 24：レマルク『西部戦線異状なし』の一節…「その驚くべき重さの前には僕らの腕は藁のようにか弱いものだ。手りゅう弾はマッチぐらいだろう。この戦車というやつは何よりも戦争の恐ろしさそのものに見えた」 → 『西部戦線異状なし』の意味は？

【爆撃機と巨大な大砲】

Q 25：砲弾はどれぐらい巨大となったか？ A：大きなものは一発で約1トン

Q 26：第一次世界大戦で使用された砲弾の数はいくらか？ それは日露戦争全体で使用された砲弾数の何倍か？

A：13億発 500倍

Q 27：ドイツ兵士の手記…「僕たちの塹壕の前につい最近まで指輪をはめた手が横たわっていました。しまいにはその手は骨だけになりました。鼠には人間の肉がとても口に合うのです。身の毛がよだちます。が、僕も時とともに慣れ、戦友と同じように冷淡になりました。戦場ではありふれた悲劇にいちいち心を動かしては気がおかしくなります。そうでなければ、腕をふりまわしながら敵に向かっていくほかありません」 → 兵士が訴えたかったことは何か？

Q 28：大量殺戮兵器の導入により前線での負傷者は一日何人となったか？ A：1万人以上

【戦争後遺症の患者】

Q 29：塹壕戦を経験した人の間で見られた神経症を何というか？ またその原因は？

A：シェルショック（砲弾による神経症）患者数は、イギリスだけでも12万人。原因は、絶え間ない砲弾の音を聞きつけたため。 → さらに詳しく原因を考えると？

【海での戦い】

Q 30：第一次世界大戦最大の海戦は？ その結果、どうなったか？

A：ユトランド沖海戦。敗北したドイツは、食糧や物資の補給に苦しんだ

【Uボート】

Q 31：潜水艦が、軍艦以外の民間の船を襲撃した理由は？ A：敵国への軍事物資などの運搬を阻止するため

Q 32：食糧難・物資難のドイツで生まれた標語は何か？ A：「欲しがりません。勝つまでは」

【ロシア革命】

Q 33：1917年のロシア2月革命の発端は何か？ A：パンの配給を待つ女性労働者のデモ

Q 34：世界初の社会主義革命を指揮した人物は誰か？ その人物が革命後最初に行なった事は何か？

A：レーニン。内外に戦争の中止を訴え、ロシアは戦線を離脱した

【ロシア革命への日本の対応】

Q 35：日本は、ロシア10月革命に対してどのような行動をとったか？（7か国が派兵）

A：シベリア出兵（7万人の兵士を派兵し、大戦後もとどまった）

【アメリカの参戦】

Q 36：アメリカ参戦の表向きの理由は何か？ 本当の理由は何か？

A：民主主義のため。巨額の貸付金の回収を確実にするため。

【選抜徴兵】【チャップリンの戦時公債宣伝】【アメリカ軍初の海外派遣】

Q 37：アメリカ軍の兵員を増やすためにどのような方策をとったか？ また黒人兵は、どのように扱われたか？

A：徴兵対象者をくじ引きで決める選抜徴兵制。アメリカ軍は10万人から400万人に。白人の反発を避け黒人だけの部隊を編成。物資の運搬や塹壕掘りなどの単純作業に従事。

【ドイツの反攻と敗北】【チェコスロバキア、ハンガリーの独立】【負傷兵の傷跡を隠すマスク】

Q 38：負傷兵の傷跡を隠すマスクが、本当に隠したかったものは何か？

Q 39：第一次世界大戦での戦死した兵士数は？ また負傷した兵士数は？

A：戦死者900万人 負傷者2000万人

Q 40：チャーチル「世界の危機」より…「戦争から惶めきと魔術的な美がついに奪い取られてしまった。アレクサンダーやシーザーやナポレオンが兵士たちと危険を分かち合いながら、馬で戦場を駆け巡り、帝国の運命を決する…そんな事はもうなくなった。これからの英雄は安全で静かで物憂い事務室にいて書記官たちにとり囲まれて座る。一方、何千という兵士たちが電話一本で機械の力によって殺され、息の根を止められる。これから先に起こる戦争は、女性や子供や一般市民全体を殺すことになるだろう。やがてそれぞれ国には大規模で限界の無い、一度発動されたら制御不可能となるような破壊のためのシステムを生み出すことになる。人類は初めて自分たちを絶滅させることができる道具を手に入れた。これこそが人類の栄光と苦勞のすべてが最後に到達した運命である」 → チャーチルの言葉をどう思うか？

【視聴後の解説をふまえての感想】

- ①この映画は、政府に禁じられていても、カメラマンやジャーナリストが命懸けで必死でつくったものであるというのをきくと、また見方が変わります。映っている戦争そのものだけでなく、その映像を必死に撮っているというカメラマンやジャーナリストさえも生々しく伝わってくる。
- ②我々は、映像をただ受け取るだけでなく、様々なことに考えを巡らせ「頭を使って」映像を見なければ、真実どころか映像が映し出す（真実の）一部すら、正しく見れないのかもしれないと思った。
- ③巧妙に編集された映像が伝えようとするものを簡単に信じてはいけないということだ。流れ続ける映像のインパクトに圧倒されるだけでなく、映っていないところがあるということ意識する大切さも第一次世界大戦は教えているのだと思った。

【Q&Aにそって】…下線の付された質問項目は、前回の授業後の課題で回答を求めたもの

Q 4：ドイツ兵士の手紙について

- ①自分のことや家族のことを考えると、自分の命が惜しくなり、戦争に行くのが嫌になるが、国民や祖国のことを考えると自分が国を守るんだという使命感を持って、勇ましく戦争に向かうことができるから。
- ②戦場で自分や家族のことを考えると、命を捨てたくない、人を殺したくないという思いにとらわれるが、国民や祖国のことを考えると、大いなる正義のためには自分の命などちっぽけだ、と割り切れるから。

⇒<討論2：家族のために戦うよりも、国家のために戦う方が価値があるのか？>

同じ死であるならば、家族や友人よりも国家のための死の方が崇高だという信念や価値観の是非に関しては、生徒の半数強が「国家のために戦うことは（家族を守ることにつながるので）価値がある」としていたが、残りは「わからない」／「国家のための戦いとは、皇帝や国王などのトップを守ることになるだけではないか」としていた。筆者は「自発的な愛国心・愛郷心と異なる、強要された愛国心に反発した者は「非国民」とされる」とコメントをした。

Q 7：開戦数か月後に兵士の「帽子」が「ヘルメット」に変わったことについて

⇒<コメント> 戦場の遺体は千切れた四肢、はみ出した内臓、砕けた頭部など「五体満足」ではない。

Q 7+：兵士のベルトのバックルにラテン語で「神は我と共にあり」と刻まれている理由について

⇒<討論3：「正しい戦い」は存在するか？ それは許されることか？>

討論3の前に、生徒にQ7に関する補足質問をした。生徒たちは「神様が守ってくれる」と解釈していたが、それに加えて「自分は正しい」という意味もあるだろう。生徒のほとんどが、予想通り「正義の戦争などない」と考えていた。筆者は「戦争を絶対悪と見なすのは、じつは戦後の日本社会特有の考えで、世界的には戦争を必要悪ととらえ、認める正戦論が存在している」と指摘した。

Q 11：戦時中の女性の役割について

⇒<討論4：戦争においても、性差別は排除されるのは当然か？>

世界史の授業では「戦時下の女性の社会進出が、後の女性の参政権獲得につながった」という説明が定番である。しかし筆者は「社会進出」ではなく「戦争協力」と強調している。そしてその究極が女性兵士の存在である。討論では、男子生徒は「希望する女性は受け入らいいが、徴兵までは必要ない。ただし近年は機械化が進み、体力面で不利だった女性も男性と対等に戦えるようになってきたので将来はわからない」という主旨が多かった。女子生徒は「女性だから戦争に行かなくてもよいというのは主張しづらいし、男女平等を進めるためにはそれも良いのかも知れない」／「最近は武器が進歩し、女性も参加しやすくなってきた。男性ばかりが戦争に参加するのはよくない」など、（本心は違うかもしれないが）兵士になりたくないという意見は少なかった。また「女性が戦地に入る際には、様々な配慮が必要になる」という重要なコメントもあった。

Q 16：死体の撮影が禁止されていたのに、ある将校が撮影した理由について

- ①当時メディアが報道していた戦争の綺麗事ばかり流し、若者たちを奮い立たせて理想とはかけ離れた戦場に送り込んでくるということに反対意見を持ち、戦争の真実を伝えなければいけないと思ったから。
- ②国で放送される映像や報道の内容は編集されたものであり、国にとって都合のいい事しか伝えられていないということに対する反抗。戦争の負の面、残酷さを伝えようとしたのだと思う。

⇒<コメント> 私にも理由はわからない。まず疑問を抱き、答えを考え続けることが大切。

Q 22：科学者が、戦争での毒物使用禁止を知っていたのに毒ガス開発に携わった理由について

⇒<討論5：戦争における「科学者・知識人」の責任とは何か？>

「戦争目的で開発をすることは許されない」／「軍事目的の研究を進めるか、止めるかを選べるならば、科学者は止める責任がある」／「軍事を目的とせずに開発したものなら、それが軍事に使われても科学者に責任はない」／「戦争目的で開発しても、それが良いものに使われたのなら科学者に責任はない」／「作ったものに対して、悪用された時のことを考えて人を守る対策を立てておくこと。作りっぱなしは無責任」など様々な感想がだされた。

Q 24：『西部戦線異状なし』の意味は？

- ③主人公が戦死した日の報告書に「西部戦線異状なし」と書かれていたことが由来しているとされてる。戦争の中で主人公の感覚が狂っていることを示しているのだと思う。
- ④西部戦線では塹壕戦と長い戦線によって、人命の損失は統計上の存在に過ぎず、どれだけの死傷者が出て、前線の突破、指揮系統が失われることのない限り、それは西部戦線の「日常」であるという意味。
⇒<コメント> 塹壕戦という形態での総力戦は、貴重な人材の消耗戦でもあった。

Q 26：第一次世界大戦で使用された砲弾の数について

⇒<コメント> 使用された砲弾の数分かるのは、戦争が政府の管理下で遂行されているから。

Q 27：ドイツ兵士の手記で、彼が訴えたかったことは何か？

- ①戦場では異常なことが当たり前で、それに順応できないと心が壊れてしまい自ら死を選ぶ方が楽になる。そういう状況が日常であると訴えたかったのだと思う。
- ②戦場の悲惨さ。既婚者の兵士の腕だけが落ちている状況、それを食べ尽くす鼠、そしてそれを淡々と手記に記す兵士本人。どれだけ異常な環境を日常としているかを伝えたかったのではと思う。
⇒<コメント> いろいろ考えられる。兵士の心理や戦場の状況を丁寧に読み取っていくことが大事。

Q 29：シェルショック（砲弾による神経症）について

- ①砲弾の音が聞こえて味方が亡くなるという光景を何度も目にしたことで、いつあの音と共に砲弾が当たって自分が死ぬのかと恐ろしくなり、砲弾の音を聞くだけでその恐れが起きるようになったから。
- ②砲弾の音が聞こえた後は近くの人が死ぬなど悲惨な状況が起きた。そのような経験を多くしたことで、大きな音を聞くだけで恐怖がフラッシュバックしてしまった。
⇒<コメント> 心的外傷後ストレス障害（PTSD）という言葉もよく使われている。言葉にできない悲惨な経験を、表面上は忘れたと思い込んでいるが意識の奥底で保持しているため、日常生活の中で不意にさまざまな身体症状があらわれてくるのがシェルショック。身体に刻み込まれた戦争の記憶。

Q 38：負傷兵の傷跡を隠すマスクが、本当に隠したかったものは何か？

- ①戦争の真実を隠したかったのだと思う。戦時中メディアの規制が厳しかった中で、戦争で顔の原型をとどめなくなることや何か欠損してしまうことは後の戦争に向かう若者たちの恐怖心を煽ってしまうから…。
- ②負傷兵自身は、戦争を思い出させる傷跡を隠したかったと思う。戦後、傷がもとで冷遇されることも恐れた。だが為政者は、たとえ生き残れても戦争の被害は大きいという事実を隠したかったのではないか。
⇒<コメント> 1960年生まれの私は、小学生時代に駅前などで生活費を乞う傷痍軍人をよく見た。

Q 40：チャーチルの言葉について

- ①歴史番組などで戦国時代の戦いは美談のように語られる。反対に世界大戦などは負の歴史として語られる。それはなぜなのか考えた時に、正々堂々勝負するということが無くなってきたからでは無いかと思う。世界大戦は甚大な被害を与えただけではなく、関係のない市民の命までも奪った。
- ②かつては戦うすべての者が命を懸けており、だからこそ互いを助け合い、命を重んじてきていた。しかし、技術の進歩やそれに伴う兵器の開発によって、命を簡単に奪えてしまうようになり、命に対する意識が低くなってしまったのだと思う。
- ③チャーチルは第一次世界大戦より前の戦争に「煌めきと魔術的な美」を見出しているが、私は人が人を殺すことは一様に悪だと思うし、当時から戦争に美や煌めきはなかったと思う。しかし、人が操る機械によって人が死んでいくということに皮肉を感じた。
- ④今現在我々が用いている技術の中には、戦争のために開発され、民間に広まったというものが多く存在する（例：GPS）。人類全てを滅ぼしかねない兵器は、実は人類にとって有用な商品となる可能性を秘めているのかもしれないと考えると、私は戦争をぶっきらぼうに批判することはできない。
- ⑤かつて戦争が魅力的で輝かしいものだったのは、力強いリーダーと前線とともに戦ったという誇りが残せたからだったのかなと思った。現代の戦争の「指示を出すリーダーが一番安全なところで座っているだけ。

前線で戦うのはたくさんの一般市民」というところはボードゲームのようだと感じた。戦士たちとリーダーの距離が（身体的にも精神的にも）離れたことは戦争をより残酷にさせてしまう要因。

⇒〈討論 6：戦争は、魅力的か？〉

多くの生徒が「自分の命に関係のない戦争なら、魅力的だと思う」、「映画やゲームなど、娯楽として楽しむ分にはとても魅力的」と正直に書いていた。

6つの討論テーマは、生徒が戦争を考えていくうえで重要なテーマだと思っている。その一方で筆者は、戦争の具体的な実態をあまり知らない彼らに長時間の討論は無理だと考えた。討論が途切れたり、空理空論に走ったりすることは避けたかった。10分程度の短時間であっても集中して複数のテーマに取り組み、戦争に対する様々な切り口と各班員の意見を知ることを優先した。

討論後、各生徒に個人研究テーマの決定と、そのテーマを選択した理由を説明させた。「総合プルーフ」の目的はグループで課題研究に取り組むことだが、この時点でグループの研究テーマ決定には無理があると考えた。まずは各生徒が自身の興味にしたがって戦争について取り組む方が有益だと考えたのである。

授業後の課題（15人提出）

……A：個人研究テーマは何か。

B：その研究テーマを選んだ理由（100字以内でまとめること）。

C：他の班員の3つの研究テーマに対する自分の感想（それぞれ100字以内でまとめること）。

（3）第3回（7月16日／14人出席）…軍隊について知る／考える

近現代の戦争について概観したあとは、軍隊の実態を知り、考えることが重要だと筆者は思った。軍隊に関しては、世界史の授業でときおり上映した映画がある。「フルメタル・ジャケット」（スタンリー＝キューブリック監督・1987年・116分）である。この映画は、前半は海兵隊訓練所での過酷な新兵訓練、後半はベトナムで市街戦という破格の構成となっている。授業では筆者は前半（約50分）だけを鑑賞させてきた。今回の授業でも、簡単な説明プリントを配布、解説をした後に前半部だけを鑑賞した^{（註8）}。

映画の前半終了時にはかなり衝撃的な場面があるので、上映終了後、部屋の照明をつけると顔がこわばっている者も多い。鑑賞後、生徒には班単位で次の項目について各10分ほど意見交換をさせた。

〈討論 1：とにかく「え～っ！」と驚いたこと、気づいたこと、疑問に思ったことを出しあおう〉

まず新兵訓練を担当したハートマンの口汚さに生徒全員が驚いていた。そこで筆者は、訓練教官を演じた人物が、本来は俳優ではなく、本物の訓練教官だったことを生徒に伝えた。新兵の訓練シーンの助言のために招いた現役の軍人の言動に圧倒された監督のキューブリックが本人をこの役にスカウトしたこと。また訓練教官の言葉があまりにも差別的・暴力的であったため日本ではこの映画を吹き替えてテレビ放映することが出来なかったこと（放送コードに抵触したこと）を伝えた。

次に「これまで軍隊に対して、銃を撃つ練習や武器の使い方の訓練を受けて、戦争に行く、というような淡いイメージしかもっていなかった」のが崩れたという意見が多かった。

〈討論 2：新兵訓練と規律には、どういう目的があるのだろうか？〉

「上官への絶対服従と人を殺す技術を学ぶ」という意見が多かった。他に「最初、非常に厳しい訓練だが、これは映画なので誇張していると思っていたが、訓練教官が本物の軍人だということを聞いて、これが現実だと驚いた」／「厳しいながらも皆で協力して充実した訓練をしているという自分勝手なイメージが崩れた」など。筆者は、軍隊では人を殺す技術だけではなく、過酷な状況で生き残る技術も学ぶこと。上官への絶対服従はその通りだが、指示待ちではなく、状況に応じて自ら適切に行動するすべを身につけることを指摘した。またこの映画が封切られ大ヒットした当時「自衛隊でもこのような訓練をしているのか？」という質問が防衛庁に殺到し、「している」と返答すると自衛隊への入隊者が減少する危険性があり、「していない」と答えると旧日本軍兵士たち（当時70歳前後か）から「やわな訓練で国防は大丈夫なのか」と非難される恐れがあり、防衛庁が困ったらしいという話を紹介した。

〈討論 3：新兵訓練で、兵士たちはどのような気持ちを味わうのだろうか？〉

「徹底的な人格否定とプライバシー剥奪で、自尊心を完全に失う」という主旨の意見がほとんどだった。「新兵は戦いに行くまでの過酷な訓練で自分や自分の過去を否定され、どんどん感情が動かなくなっていく。このような訓練を受けて感情が動かないようにしなければ人を殺すことができない」という意見もあった。人格否定やプライバシー剥奪の例としては、前述した訓練教官の罵詈雑言以外に、入隊時の頭髪の坊主刈り、両親を侮蔑する猥歌、仕切りのない大使用トイレなどが映画に出てきていた。

授業後の課題（15人提出）

……「フルメタル＝ジャケット」（前半）について A・Bは、指標で評価しなさい（註9）。

A：この映画は有意義でしたか？ その理由を記すこと（200字以上）。

B：この映画を誰かに勧めたいですか？ ⑤もしくは④の場合は、観てほしい人と、その理由を記すこと。また②もしくは①の場合も、その理由を記すこと（ともに200字以上）。

C：軍隊に対する考え方や感じ方はどのようなものですか、少し丁寧に記すこと（300字以上）

「フルメタル・ジャケット」に関するアンケート結果は以下の通りであった。

項目A… ⑤：5人 ④：9人 ③：0人 ②：0人 ①：0人 ★：1人 …平均：4.4

項目B… ⑤：3人 ④：3人 ③：5人 ②：3人 ①：0人 ★：1人 …平均：3.4

項目Aに関しては、ほぼ全員が⑤か④を選択していた。自衛隊は存在するが、日本社会では表に見えなくなってしまった「軍隊」というものを生徒たちは初めて認識したのではないかと思う（筆者は、祖父や伯父から軍隊経験・戦場経験を直接聞いた世代である）。項目Bに関して、③や②を選択した生徒のほとんどが「自分には有意義だったけれども、他人に勧めるかは微妙。戦争や軍隊に興味のある人ならOKだけど」と書いていた。なかには「ミリタリー系の好きな友人に勧めて話題を共有したい…④」や「戦争や軍隊について学ぶ出発点として高校生に見て欲しい。幼すぎると映画の内容を受け止めきれないし、高校生より年上になると自分の考えが固まってきて、他人の意見を吸収できなくなるから…⑤」という生徒もいた。

項目Cについても、いくつかのコメントを要約して紹介する（文末の丸囲みの2つの数字は、項目A-Bの選択肢）。まず「軍隊に志願する人は、国家や一般国民のために皆がやりたがらない危険な任務を請け負ってくれているのだから、尊敬するべきだ（日本の自衛隊員も同様である）。しかし兵士には厳しい訓練を課す必要があるとも考えている（流石に現在の軍隊では「フルメタル＝ジャケット」のような人権侵害に近い過酷な訓練は必要ではないだろうし、実際行われていないと思うが）。少し残酷かもしれないが、国家に奉仕する兵士たちに尊敬を抱きつつも彼らにはより一層奮励努力して頂きたいと思う…⑤-④」。「戦時中の新兵訓練は厳しいが、平和時はそうでもない」と考える生徒が複数名いたが、それはあり得ないだろう。

つづいて代表的な意見を列挙しておく。「以前は努力次第で常備軍をなくすことも可能ではないかと考えていたが、「フルメタル・ジャケット」を見て、それは無理だと思った…④-②」／「現代における軍隊は体力的にハードな訓練があったり、とても厳しい環境ではあるが、仲間との団結を感じることができたり、根性がついたり、礼儀が学べたりなど（予想でしかないが）、多くの大切なことを学べる場でもあると思うので、プラスのイメージを持っている…④-②」／「我々にとって最悪手は、無関心であり、無知であることだ。「軍隊は怖い」というイメージは強いが、怖いからといって知らぬ存ぜぬとなるのではなく、そこで何が行われているのかという事に常に関心を持って、意見を発していきたい。なお、今回の映画鑑賞で一度は自衛隊に入りたいという微かな気持ちはほとんどなくなった…④-⑤」／「日本の軍隊といえば自衛隊ですが…最近ではテレビのバラエティ番組で取り上げられることが多くなり、「自衛隊の特殊部隊に潜入！」などをいつも楽しく見ています。この違いは何なのかが気になります。映画のような軍隊はもう存在しないのでしょうか…④-④」／「戦争はなくなって欲しいし、軍人の方が亡くなることもなくなってほしい。でも戦争に軍隊を派遣するのをやめようと仮になったとしたら、国土は蹂躪されて、多くの市民が死ぬかもしれない。こちらも、もちろん自分も死ぬかもしれないから嫌だ。軍隊は自分の命を守るために軍人の命を盾にして他人と戦うというすごく嫌な制度だと思う。国民一人一人が背負うべきものを代わりに背負ってくれているという感じがする。しかも命をかけて。とりあえず戦争がなくなって、こんなことを思わなくていいようになりたい…⑤-⑤」／「コスタリカは、軍隊を持たない国で、日本のような自衛隊も持っておらず、内戦の経験から軍事費に国家予算を充てるよりも、教育に充てた方がいいのではないかという考えを持ち、それによって国内の識字率が97%になったということはとてもすごいことだと思います…④-②」。

3. 2 学期（第 4 回～第 9 回）

（1）第 4 回（9 月 30 日／16 人出席）…女性兵士について知る／考える

8 月に NHK-E テレの番組「100 分 de 名著」でベラルーシ（旧ソ連）の作家アレクシエーヴィチの『戦争は女の顔をしていない』が取り上げられていた。筆者は、当番組の録画を生徒に視聴させようと考えた。女性兵士の個人的体験や社会の評価を通じて戦争を考察することが目的である。

「100 分 de 名著」は 1 回 25 分、4 回 100 分という構成なので、各班の 4 人にそれぞれ番組 1 回分のコメントを担当させることにした^(註10)。各回の視聴後、担当者が 5～6 分間コメントをする。残りの 3 人は聞き役に徹し、時間に余裕があれば質疑をするという形態である。全員がローテーションで 1 度コメントーターを務めるというのは、生徒たちには納得しやすい形態だったようである。また話題が、女性兵士という意外性もあったのか、各班とも熱心に取り組んでいた。

授業後の課題（10 人提出）

……「戦争は女の顔をしていない」の感想文（400 字前後）を提出してください。

今回は課題の提出状況が良くなかったのが残念だった。生徒の感想文をいくつか紹介したい。

「女は死に方や外見を気にする…まず髪を切ることにしてだ。男は坊主になっていることを知っていたはずなのに女は髪を切る必要がないという考えがどうしてできるのか理解できなかった」／「気になったのは作品全体の女尊男卑色です。元狙撃兵の女性は、敵を狙撃銃で撃ち殺して「これは女のする仕事じゃない」と思ったそうです。そんな凄惨な仕事は男性がするべきものでもないでしょう。他にも「戦争で嫌なことは死ぬことではなく男物の服を着ることだ」などと言ったり、女性のみを戦争で踏みにじられた「ちっぽけな人」という被害者扱いするのも鼻につきます。作品全体を通して戦争をする国や軍部、つまり男性たちが悪で女性たちはかわいそうな被害者だという偏った傾向があるように思います。…戦争は悪ですが男性のみを絶対悪とするのは間違いだと思っています」…これらの感想文は男子のものである。

一方、女子の感想文は次のようなものだった…「個人的にひとつ気になったところが、女性たちが兵士だったときの心境や経験についてだ。たとえば長く伸ばしたお下げ髪を切りたくないと思ったり、服のサイズが合わないと思ったり、死ぬことよりも無様な顔を見られる方が嫌だったりだとか、彼女たちが対談によって残した話からは当時の彼女たちの事細かくで複雑な心情が垣間見られる」／「最も印象に残ったのは包帯でウェディングドレスを作った女性の話だ。その女性は少しずつ残しておいた包帯で作ったウェディングドレスを着た時はとても嬉しかったと言っていた。しかし、私はその嬉しいという感情だけではなかっただろうと思う。もちろん結婚式が出来たということはとても嬉しい記憶であるに違いない。でも、戦地での結婚式となると「なぜ、このようなところで」という思いも少なからずあるのではないだろうか。…戦争の中で感じる少しの日常のようなエピソードはあまり聞くことがないので貴重であると感じ、もっと自分に身近なこととして考えることができるようになった。…今回、女性兵士たちの実際の戦地での様子や感情などを知って、より戦争を現実的に感じられてよかった。また、男性物の下着しか支給されなかったことや、生理についてなど、女性特有の戦争体験なども多く、印象的で、実際の証言がそのまま紹介されているため、女性兵士たちの戦争に対する感情や意思をとて深く理解することができた」／「一番印象に残っていることは、女性兵が道端にあったスマイレの花を摘み、銃につけたという話です。おそらく、普段戦争に近い殺風景な所での生活を送っていた中でスマイレの花のきれいさに見とれて摘もうと考え、その中でただ花をくくろうと思っただけなのかもしれません」。

ごく少数の感想文から判断するのは危険だが、男子生徒は「女性でも兵士である以上は、男性兵士と同等に扱われるべきで、戦場にふさわしい感情で行動すべきだ」という感情が強いようである。一方、女子生徒は「戦場という非日常のなかでも日常性を大切にしたいし、それは非難されることではない」と思っているようである。両性とも、女性兵士が戦後に差別・排除されたことに対してはつよい怒りを表明していた。

アレクシエーヴィチの長編『戦争は女の顔をしていない』をわずか 100 分で理解できるはずはないし、また生徒たちが誤解をしている部分も少なからずあるだろう。授業後に「この本をいつか読んでみたい」／「この本を漫画で持っています」と話してくれた生徒がいたことも印象深かった。

（2）第 5 回（10 月 7 日／16 人出席）…第 1 回 読書紹介

夏季休暇の課題として、筆者は、各生徒に自身の個人研究を進めるための書物を選び、読了することを課した。そしてグーグルクラスルームのコメント機能を用いて、生徒と書選に関する遣り取りをしてきた。今回、各生徒が紹介するのは休暇中に読んだ課題図書である。読書紹介の形態は、以下のように定めた。

- ・夏季休暇の課題図書の内容紹介、およびそれに関するコメントを紹介者は班員に12分間報告する
- ・報告後は、10分間の質疑応答・意見交換をする 各班員は少なくとも1回ずつは質問・意見を述べる
- ・コメントシートに他の班員の報告に対してコメントを記す / 質疑応答・意見交換後の感想を記す

筆者は、いま流行のビブリオバトル（優劣を競うコンテスト形式）は、今回は不適切だと考えていた。ビブリオバトルでは、紹介された書物の魅力の有無と報告者のプレゼン能力の巧拙とが区別できない。また自分が読んだ本が他と比較され優劣を決められるのは不愉快だろうと考えた。さらに書物の要点と魅力を短時間で伝える技量は大切だが、近年はそれが偏重されていると思っていた。一方で、紹介時間を長めに設定すると受講者全員の書物紹介が授業1回分では収まらない。そこで班単位での読書紹介にしたのである。生徒全員お互いの読書内容を知って欲しかったが、それはリストの配布で間に合わせることにした^(註11)。なお生徒には、読書紹介のための参考レジュメ（A4判1枚）を作成し、班員に配布するように指示した。

12分間の報告時間というのは、高校生には結構長く、とにかく制限時間すべてを埋めようと懸命な者が多かった。また班単位での読書紹介だったので質疑応答も筆者の予想した以上に活発であった。

授業後の課題（13人提出）

……12分間の報告は、意外に難しかったのではないのでしょうか？ まず気をつけなければいけないのは、

- ①：本を読んで得た「自分にとっての常識・前提の知識」を他の参加者が必ずしも共有していないということをふまえて話を組み立てること。②：①と関連して、報告全体のアウトライン（概要）をレジュメなどであらかじめ他の参加者に提示しておくこと。③：予想される質問を想定し、その対応を考えておくこと…でしょうか。ではA～Cについて、指標で評価し、その理由も記してください。

A：自分の作成したレジュメは、報告に際して有効だった

B：12分間の報告について a：内容紹介は十分にできた b：適切なコメントができたか

C：10分間の質疑応答・意見交換について a：10分は長すぎた b：積極的に参加できた

アンケート結果は以下の通りであった。

項目A	…	⑤：1人	④：2人	③：5人	②：3人	①：2人	★：0人	…平均：2.8
項目B-a	…	⑤：2人	④：5人	③：4人	②：2人	①：0人	★：0人	…平均：3.5
-b	…	⑤：2人	④：2人	③：6人	②：3人	①：0人	★：0人	…平均：3.2
項目C-a	…	⑤：1人	④：6人	③：2人	②：3人	①：1人	★：0人	…平均：3.2
-b	…	⑤：4人	④：7人	③：1人	②：1人	①：0人	★：0人	…平均：4.1

項目Aの評価はさまざまだが、「次回は、もっと良いレジュメを作りたい」という主旨が大半だった。具体的には、図表を充実させる。レジュメの内容と説明を一致させる必要があるなどである。項目Bのaについては、報告時間の長さとも関係しているだろうが、「本をもっと深く読み込んでおくことが重要」という意見が大半だった。bに関しては「本の言葉ではなく、自分の言葉で説明できるようにしたい」/「前提となる知識をしっかりと伝えることが重要だと思った」/「語尾を曖昧にはいけない」などのコメントがあった。項目Cのaに関しては、「具体的な質問が多く、簡単な回答だったので時間が余った」ようだが、「制限時間をいっぱい使うような質疑応答や意見交換ができるようにしたい」という意見もあった。bに関しては「同じ事柄に対して、自分とは違う見方を指摘されて新鮮だった」という感想が多かった。また「自分の読んだ本に、班員が興味を持ってくれたので嬉しかった」という意見が散見されたのが良かった。4人という少人数の間での読書紹介だったこともあって、密度の濃い活動が出来たのかもしれない。

(3) 第6回（11月11日/16人出席）…第1回 巡検

新型コロナの流行が少しおさまってきたので、大阪市内の戦跡巡りをした^(註12)。当初は「ピースおおさか大阪国際平和センター」（以下、「ピース大阪」と略）の見学を予定していたが、日没の早くなってきた時期なので戦跡巡りを優先した。当日は生憎の雨天であったが、14時30分に学校を出発し、17時過ぎに帰着、

[参考資料 2] 生徒の個人研究テーマと読書紹介での書物一覧

（生徒名は省略し、研究テーマのみ記載／書名の前の☆印は第 1 回、◎印は第 2 回での紹介図書）

*戦争と政治

☆アドルフ・ヒトラー、平野一郎他訳『我が闘争』上下（角川文庫・2016 年）

◎佐藤優『ファシズムの正体』（集英社・2018 年）

*戦争によってできた文化

☆熊谷充晃『教科書には載ってない戦争の発明』（彩図社・2016 年）

◎マーチン・ファン・クレフェルト、石津朋之監訳『戦争文化論』上下（原書房・2010 年）

*戦争下における美術

☆司修『戦争と美術』（岩波書店・1992 年）

◎溝口郁夫『絵具と戦争』（国書刊行会・2011 年）

*戦争と化学

☆池内了『科学者と戦争』（岩波書店・2016 年）

◎益川敏英『戦争で科学者は何をしたか』（集英社新書・2015 年）

*兵士が戦場で戦う時の心情について

☆デーヴ・グロスマン、安原和見訳『戦争における「人殺し」の心理学』（ちくま学芸文庫・2004 年）

◎メシメール・ベア、忠平美幸訳『戦場から生きのびて ぼくは少年兵士だった』（河出書房新社・2008 年）

*戦争に関する映像・映画

☆清水晶『戦争と映画 戦時中と占領下の日本映画史』（社会思想社・1994 年）

◎飯田道子『ナチスと映画 ヒトラーとナチスはどう描かれてきたか』（中公新書・2008 年）

*戦争の遠因 どこからなら引き返せたのか

（不明）

*兵器の発達を兵士はどう見てたか

☆齋木伸生『ドイツ戦車発達史』（光人社・1999 年）

◎山北篤『現代知識チートマニュアル』（新紀元社・2017 年）

*化学兵器と戦争について ⇒ 開戦に対する国民の考え

☆加藤陽子『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』（新潮社・2016 年）

☆仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』（角川書店・1980 年）

◎アーサー・ピナード編著『知らなかった、ぼくらの戦争』（小学館・2017 年）

*人はなぜ、映画やゲームで戦いを好むのに、戦争を恐れ、嫌うのか？

☆星川啓慈他『人はなぜ平和を祈りながら戦うのか？（私たちの戦争と宗教）』（並木書房・2014 年）

◎アインシュタイン・フロイト、浅見昇吾訳『人はなぜ戦争をするのか』（講談社・2016 年）

*ベートーベンとナポレオン ⇒ 音楽と戦争

☆樺山紘一『《英雄》の世紀 ベートーヴェンと近代の創成者たち』（講談社学術文庫・2020 年）

◎片山杜秀『革命と戦争のクラシック音楽史』（NHK出版新書・2019 年）

*戦争による兵器の変化

☆金子常規『兵器と戦術の世界史』（中公文庫・2013 年）

◎A = J = P = テイラー、吉田輝夫訳『第二次世界大戦の起源』（講談社学術文庫・2011 年）

*戦争における人民の扇動 ⇒ 戦争と法

☆内田博文『治安維持法と共謀罪』（岩波新書・2017 年）

◎坂野潤治『明治憲法史』（ちくま新書・2020 年）

*戦争と国民の思想

☆小手鞠るい『ある晴れた夏の朝』（偕成社・2018 年）

◎長田新編『原爆の子 広島の子のうたったえ』（岩波文庫・1990 年）

*国が国民の思考や行動をどう操ったのか

☆高木徹『ドキュメント 戦争広告代理店／情報操作とボスニア紛争』（講談社・2002 年）

☆アンヌ・モレリ、永田千奈訳『戦争プロパガンダ 10 の法則』（草思社・2002 年）

◎田島奈都子『プロパガンダ・ポスターにみる日本の戦争 135 枚が映し出す真実』（勉誠出版・2016）

*科学の歩みと戦争

☆益川敏英『科学者は戦争で何をしたか』（集英社・2015 年）

☆廣重徹『科学の社会史』（中央公論社・1993 年）

◎バリー・パーカー、藤原多伽夫訳『戦争の物理学』（白揚社・2016 年）

解散した。具体的なコースは以下の通りである。生徒には地図を配布し、各地点で筆者が簡単な解説をした。

①大阪砲兵工廠跡碑（森之宮団地）⇒ ②JR大阪城公園駅 ⇒ ③大阪城ホール（大阪砲兵工廠本館を1981年に大阪市が取り壊す）⇒ ④大阪砲兵工廠荷揚げ門 ⇒ ⑤鉄の塊 ⇒ ⑥大阪砲兵工廠化学分析場 ⇒ ⑦大阪砲兵工廠跡碑（京橋口）⇒ ⑧大阪砲兵工廠アーチ門 ⇒ ⑨大阪城内 中国製狛犬 ⇒ ⑩大阪城内 大阪国防館跡 ⇒ ⑪大阪城内 山里曲輪の石垣 ⇒ ⑫大阪城内 天守閣東北隅の石垣 ⇒ ⑬大阪城内 天守閣西南隅の石垣 ⇒ ⑭大阪城内 第四師団司令部庁舎 ⇒ ⑮大阪城内 銘板 ⇒ ⑯大阪城内 中部軍司令部防空作戦室跡 ⇒ ⑰大阪城内 蛸石東側 ⇒ ⑱大阪城内 地下壕出入口跡 ⇒ ⑲大阪城内 「陸軍省用地」石標

授業後の課題（9人提出）

……A：本日の戦跡見学全体の感想を記せ（600字前後）。

B：本日の戦跡見学でとくに印象に残ったものを3つ選び、その理由を記せ（各200字前後）。

複数票は次の通り…②：7人 ⑥：4人 ⑫：4人 ③：2人 ⑤：2人 ⑦：2人

全体の感想としては「これまでの授業は座学や討論が多くフィールドワークをすることは初めてだったため、少し疲れたが楽しかった」／「大阪城は明治以前の歴史しか残っていないと思っていたが、戦争にも関わっていたとはとても意外であった。しかも戦争との関わり方も予想とは違って主に関係しているのだと知った時は正直嫌な思いをした」／「こんなにきちんと工場の建物や、戦争の被害にあった石垣などが残っているというのに驚きましたし、実際に見ることで、昔日本は本当に戦争をしていたのだな、ということ改めて感じることができました」／「大阪城は小さいころから何度も訪れている場所だが「戦跡を見る」という観点で訪れたのは初めてで、いつもの見慣れている風景が別物のように感じた。…小学校の遠足で大阪城を訪れたときは江戸時代の話しか聞かず、私自身も大阪城と言えば豊臣秀吉が…というようなイメージしかなかったため新鮮だった」／「大阪城ホールを訪れる人の多くは、ほんの数十年前までそこが日本陸軍の砲兵工廠の本館だったとは知らないだろう。好きなバンドやアイドルのコンサートが開かれ、自分が幸せに浸っているその場所が、人を殺す道具を作っていた場所だなんて思いもしないに違いない」など。

戦跡を個別にみると、②に関しては「森ノ宮ー京橋間が大阪環状線内で唯一高架ではないこと、大阪城公園駅そのものも道路と地続きであること。ふだん利用していながら気がつかなかったという驚きもあるが、それよりもここが高架ではない理由に衝撃を受け、同時に納得した。戦争中も勿論電車は動き人も乗る。だからこそ、砲兵工廠という機密情報まみれの場所が見えるような作りになる訳が無かったと納得した」。

⑥については「これを英語にすると「Osaka Arsenal Chemistry Lab」である。アーセナルといえばイングランド・プロサッカーリーグに加盟するクラブである。エンブレムには大砲が描かれている。前々からどうしてエンブレムに大砲があるのか疑問に思っていた。arsenalには兵器廠という意味があり、軍需工場の労働者のクラブとして創設されたことから大砲が描かれていることが分かった」／「不謹慎かもしれないが、廃墟になった研究棟ということにわくわくした。戦後も大学の校舎として使われていたということは、私もいつか入れないものかという夢にふけてしまった」など。

⑫については「石垣が崩れてこないのが不思議なほど凸凹していて驚いた。1tという単位が想像できないほど大きく、実際にこの大阪でそのような爆弾が落とされていたということが信じがたかった。…普段大阪城の裏に回り込んで見るということが無かったので、今度行ったときはじっくり見てみようと思った」。

⑲については「石標が、いまでは倒れて木々の中に埋もれてしまい、おそらくだれも気が付かないようなただの石と化しているのが印象的だったから。「夏草や兵どもが夢の跡」という松尾芭蕉の句を思い出した。また「陸軍省」が本当にあったのだなとしみじみと感じた」。遺跡は詩人を生み、廃墟は哲学者を生む…。

（4）第7回（11月25日・16人出席）… 第2回 巡検

2回目の校外活動では「ピース大阪」を見学した。訪問前に森之宮神社を訪れ、狛犬の台座に残る機銃掃射の跡を見た。今回も雨天であったが、14時30分に学校を出発し、17時過ぎに帰着、解散した。

授業後の課題（10人提出）

……A：「ピース大阪」見学の全体の感想を記せ（600字前後）。

B：「ピース大阪」の展示の中で特に印象に残ったものを3つ選びその理由を記せ（各200字前後）。

全体の感想としては「最初はじめて訪れるところだと思っていたが、いざ見学してみると前にも来たことを思い出した。前回訪れたときは、まだ戦争について深く知っていなかったし、どれほどのものなのかも理解できていなかったため、このピースおおさかの展示の意味がよく分からなかった。しかし今回訪れた私にとってこれらの展示物はとても怖く感じた」／「小学生の時に行ったことがありましたが、今も心に残っていることは特にありません。小学生のときは、戦争はダメだということばかり言われることに反発を感じていて、心から戦争を否定する気持ちになることがなかったので、心に何も残らなかったのかなと思います。けれども、今は戦争は嫌なことだと思っているので、感じるが多かったです」／「平日の午後だということに、私たち以外の一般の方もそれなりに訪れていることが意外に思えた。学校の課題とかではなくても、戦争について知りたい、知らなければならない、と考えている人は私が思っていた以上にいることが分かり、どことなく安心感を覚えた」／「前回まわった大阪砲兵工廠やその戦跡に関する資料に加え、戦時中の国民生活に関する資料や大阪での空襲に関するものなどたくさんの資料があってとても感慨深かったです。大阪砲兵工廠に関する資料の展示では、戦跡を回るだけでは気づきにくいことや情報などがあり、前回の学びを深めることができよかったです」／「戦争の資料館にはこれまでも何度か訪れたことがあった。もちろん現代の技術で再現された模型やイラスト、CGはとてもわかりやすくリアリティのあるものばかりだが、やはり当時の人々の遺品や戦争で実際に使われた兵器の一部などからは、再現されたものとは比べ物にならないほどの圧迫感というか、重みがあった」。

印象に残った展示（物）として数多くの生徒が言及したのが、当時の人々が書いた手紙、あるいは思い出して描いた戦争画であった。たとえば「子どもに関する展示が多くあったのですが、特に、戦争に行つて敵をたたきつぶしてやりますと親に書いた手紙が心に残りました。子どもがそんなことを言っていたということに衝撃を受けましたし、悲しくなりました。子供に敵をたたきつぶしてやりますというようなことを言わせたのは、そういった気持ちにさせたのは教育だと思います」。あるいは「疎開先の子どもから親へとあてた手紙に「大阪へは、かえりたく、ありません」と書かれていました。疎開先での生活も苦しいはずなのに、親に心配をかけまいという一心でこのように書いたのだと思うと、胸が苦しくなりました」など。

多くの生徒が防空壕体験が印象に残ったと書いていた。「防空壕の中は本当に怖かった。特に外からの救助を求める声が怖かった。助けてやりたいのは山々なのだが、この扉を開けてしまうと自分達にも被害が出るので、開けようにも開けられないこの状況に複雑な感情を抱いた」／「朝ドラ（カムカムエヴリバディ）でヒロインが自分の子供を抱きかかえて防空壕で空襲のなか一夜を過ごすという場面を見てすぐだったので、その場面が思い返されて、さらに防空壕に入ったときに音声が流れてきて、とてもリアルで怖かった」／「あれほど小さな空間で命の危険を感じながら、外で鳴り響く轟音や燃え盛る炎に耐え続けなければならない当時の人々の心情は想像を絶するほどのものであったと思う…気になったことは、防空壕の入り口が建物の倒壊などで塞がれてしまった場合はどうしていたのかということだ」。

その他、「戦時下の動物園」「戦時中の代用食のサンプル」「焼夷弾のレプリカ」をはじめ数多くのものが、印象に残った展示としてあげられていた。

（5）第8回（12月9日／16人出席）…第3回 巡検

3回目の校外活動では真田山陸軍墓地の見学をした。陸軍墓地の見学は当初予定していなかったが、戦跡を調べていくうちにこの場所は外せないと考えた。3度目の正直であろうか、当日は小春日和であった。10時30分に学校を出発し、陸軍墓地の訪問前に騎兵第四連隊の忠魂碑、三光神社の片柱の鳥居を見学した。陸軍墓地の後には、JR大阪環状線玉造駅の黒門町架道橋の機銃掃射跡を見学し、13時過ぎに現地で解散した。

陸軍墓地では、入口近くの説明板を読ませた後、墓地の区画図を配布した。そして4つの班にそれぞれ墓地のA、C、E、Gの区画から各区画15分程度で見学し、全体を回るように指示をした。なお、見学時に真田山陸軍墓地維持会の方々にお会いし、いくつかの班は説明をしていただくという幸運に恵まれた。

授業後の課題（9人提出）

……A：真田山陸軍墓地を見学しての感想、あるいは疑問を記せ（600字前後）。

B：a－騎兵第四連隊の忠魂碑の感想 b－三光神社の片柱の鳥居の感想

c－玉造駅黒門町架道橋の感想（a～cは各200字前後）

授業中の活動は熱心だが、授業後の課題提出者が徐々に減っているのが残念だった。

項目Aについては「生前の地位によって墓石の大きさや置かれる場所、置かれ方が異なっていたのが日本人らしいなと思った。下位の軍人の墓石の方が数が多く、所狭しと並べられていたのに対して、将校の墓石はしっかりとスペースを確保しゆったりと置かれていたことに複雑な気持ちを抱いた。…以前祖母と墓参りへ行ったとき上部が尖っているお墓は戦死した方のお墓だと教えてもらった。真田山陸軍墓地にも同様の墓石が沢山あり、なぜこのように墓石の形を変えるのか不思議に思った」／「事務所の方が学校ができる時に土地を譲ったとおっしゃっていた。そのため、軍夫の方たちのお墓が事務所の前の土地に移されたそう。そしてその際にお墓の並びの順序が壊れてしまったということも教えてもらった。事務所の方は親切で色々教えてくださったので、自分たちだけで墓地を回っているよりも深く知ることができてよかった」／「戦争では良くも悪くも兵士が主役といったようになりがちで、陸軍墓地にも兵士の墓がほとんどなのだろうかと考えていたが、実際に見学してみると、看護人や守衛、物資の運搬員、そして他国の捕虜の墓石も多くあり、…しかし、お墓が建てられた土地の高さで階級や身分の上下を表すという話にはあまり良い印象を持てなかった」／「日清戦争での死者のお墓は一人一つ分の土地が用意できたのに対し、日露戦争での死者は合葬墓にしないと死者が多すぎていくらあっても土地が足りなかったということからも、やはり日清戦争と日露戦争では規模が全然違ったということがよく分かった」など。

真田山陸軍墓地の見学に際しては事前学習が不十分だったので、次のようなコメントもあった。…「ピース大阪の見学と比べると、印象に残ることや、興味を惹かれることがありませんでした。…少ない情報からできるだけ多くのことを得る力が乏しいからだと思います。ピース大阪に比べて、今回の墓地は情報量が圧倒的に少なかったと思います。もしかしたら情報を情報としてとらえる力も足りていないのかもしれませんが…」／「墓地という形でこうして実際の軍人や関係者の足跡に触れることは今までなかった。とはいえ、ただの墓石なので時間当たりの学習内容の濃さはあまり高いものではなかったと思う」。また墓地の見学が苦手という生徒がおり、配慮が必要だったことに後で気づいた。反省点である…「非常に足が重かった。…これほど多くの人数の遺骨が埋められているところを歩いていると考えるととてもゾツとした」。

項目Bのaについては「この忠魂碑は前に見たことがあったが、その時は大きな石碑だなと思っただけで、一体いつ作られた物なのか、どんなことが刻まれているのかといったことにはあまり興味をもっていなかった。馬に乗って戦う戦法は、強力な兵器がまだ開発されていない頃だったからこそ活躍できたのだと思う。忠魂碑に書かれた内容はまさにその戦績を讃え、戦争を鼓舞するような書き方で、当時の人々がいかに兵士として戦うことは名誉であると教育されていたのかが分かった」など。

項目Bのbについては「そもそも鳥居のそばに壊れた鳥居の柱が残っているだなんて考えないし、仮にその柱を見つけても、教えられていなければ、なぜ壊れた鳥居を撤去しないのだろうと思うだけだった。戦争があったという事実を形に残すという目的があって鳥居は残され続けているのであり、戦争の資料館に行かなくても、戦争の痕跡は今も街中にたくさんあって、自分がそれを知らないのは、今まで関心が足りなかったからなのだろうと反省している」など。

項目Bのcについては「普段利用している環状線自体に戦跡があるということにまず驚きました。普段は乗っているため、外から線路を見るという機会も無く、新鮮でした。線路の駅に入る直前の橋のところで、柱にも大きな機銃掃射痕の大きな穴があり、また橋自体にもいくつか大きな穴が開いていた」／「機銃掃射の痕跡から、銃の打ち込まれた角度を計算して、明らかに道路、そして高架下の人々を狙うような攻撃の仕方であったという話を聞いたときにはゾツとした。この架道橋は長堀通りにかかっている橋であり、ある程度は大きな道である。だから多くの人々が通りを歩いていたろうし、急な空襲から逃げるため、架道橋の下に逃げ込んだ人も多かったと思う。そこを狙うのは明らかに市民の命を奪うための攻撃であり、軍事工場だけでなく、一般人への攻撃もたくさん行われていたことが考えられ、とても胸が痛くなった」など。

(6) 第9回（12月23日／14人出席）…戦争映画を見る／戦争映画を考える

第3回の授業で「フルメタル・ジャケット」を鑑賞したが、前半部だけであったし、その前半部も戦争映画というより軍隊映画であった。授業も終盤となり、戦場を描いた戦争映画を生徒に見せたいと考えた。とはいえ、映画によって戦争の描き方はさまざまである。いくつかの候補の中から最終的には、ノルマンディー

上陸作戦を扱った「プライベート・ライアン」（スティーヴン・スピルバーグ監督・1998年・170分）に決めた¹³⁾。ただこの映画はかなりの長尺であり、授業を2回に分けて鑑賞するのが適切なのかもしれない。実際は、定期考査後の短縮期間中の一日をあてた。当日は、簡単な説明プリントを配布、解説をした後に鑑賞した（10時55分～12時50分に前半、昼食後13時20分より後半を鑑賞）。

授業後の課題（8人提出）

……A：映画「プライベート・ライアン」を高く評価する

指標で評価し、その理由を示しつつ、あなた自身の映画の感想を書きなさい。（600字以上）

B：「プライベート・ライアン」が世間で高く評価されている理由を考察しなさい。（300字以上）

C：これまでに見た戦争映画の中で、印象に残っている作品名とその理由を記してください。

D：戦争映画は好きである 指標で評価し、その理由を書きなさい。（300字以上）

項目A… ⑤：1人 ④：4人 ③：0人 ②：1人 ①：0人 ★：2人 …平均：3.8

「まず初めのノルマンディー上陸作戦のシーンは、私は個人的にとっても好きだった。かなりグロテスクで、正直目を覆いたくなる場面もたくさんあったが、とてもリアルであったし、シーンの一つ一つに躍動感があってカッコいいなと思った。また、私は戦争ゲームをよくしているのだが、そのゲームで描かれている上陸作戦と映画の上陸作戦が非常によく似ていた。…しかしリアルさを追求した結果、ドキュメンタリー映像なんじゃないかこれ。と感じてしまい、私には途中から退屈に感じられた…②」／「今まで見た中で一番戦場に行きたくないと思わせる作品でした。想像していたよりも戦場はひどいところだと感じたからです。こんなにも死と隣り合わせなのかと驚きました…★」／「私は今回初めて戦争映画というのを見ました。そのためこの映画をどう評価すれば良いのか図りかねますが、間違いなく良い経験になったと思います…★」／「この映画では、戦争の中での友情や信頼関係が描かれているが、良い部分だけを切り取って、中途半端に戦争が美化された映画ではなく、戦争の恐ろしさも生々しく表現されていた。…映画を見終えたあとは感動と惨めさとがごちゃごちゃになってしばらく何も考えられなくなるほど内容の濃い作品であった…⑤」／「本当に、厳しい戦況下で1人の兵士を救出するためだけに8人もの兵士が送られたのかと疑問に思い、インターネットで調べてみたところ、ソウル・サバイバー・ポリシー制度というものがあり、兄弟が亡くなった兵士が保護されたことは実際にあって、その実話を基にこの映画が作られたけど、実際にこの映画のように救出隊が派遣されたことはなかったということがわかって正直少し納得しました…④」など。冒頭のノルマンディー上陸作戦のシーンをグロイと書く生徒が非常に多かったが、戦場とはグロイものである。

項目Bについては、「はじめのノルマンディー上陸作戦の高い再現性であると思う。海岸の当時の様子を再現するために多くのエキストラを使っていたし、莫大な費用がかかっていると思う。そのおかげでとてもリアルであったし、セット感が感じられなかった。また、カメラワークも素晴らしいものであると思った」／「私は3つの部分がリアルだと感じました。まず1つ目は、映像です。血や臓器が体外に出ている様子や、不潔さがリアルだと思いました。2つ目は、ストーリーです。都合が良いと思わせるような場面は少なく、多くの人があっけなく死んでいくという、夢のないストーリーでした。3つ目は、登場人物の多様さです。現実と同じように、業務や性格の異なる様々な人々がでていました」／「戦争のシーンがリアルであるということが一番にあげられると思いますが、それと同じくらいに登場人物の設定が良いということもあげられるのではないかと思います。…このように技術面と内容面どちらも評価されているのだと思った」など。

意外にも戦争映画をほとんど見たことがないという生徒が多かった。結果として項目Cに関しては、あまり多くの映画があがらなかった。「フルメタル・ジャケット」「火垂るの墓」「日本のいちばん長い日」「永遠の0」など。テレビドラマの「はだしのゲン」をあげる者もいた。

項目D… ⑤：0人 ④：1人 ③：2人 ②：2人 ①：0人 ★：3人 …平均：2.3

「戦争映画が好きとは言えません。実際今回観たようなかなり悲惨なシーンもあり、目を覆いたくなるようなものもあるからです。しかし、戦争を全く知らない自分たちの世代だからこそ、…当時の文献などでは感じることはできない光景を目にすることで、怖さや様々な感情をもって、より平和を願うことが出来るということについては、戦争映画を観るということのメリットもあると思います。…③」／「映画は娯楽の一種だと思っているので、一つの映画を観て「ここから何が学べるのか」とか考えるのは凄く嫌だ…戦争映画というのはなんらかの教訓を感じなければならないというような雰囲気させながら映像を流してくること

が多いので、ストーリーが感動的なものであっても素直に感動することが出来ない…②」／「今回初めて戦争映画を見てみて、好きか嫌いかで答えられるものではないなと思いました。…戦争は今後映画の中だけであってほしいとも思いました…★」／「戦争映画を見ると精神的ダメージが大きくて気持ちが沈んでしまう。そのため、自分で見るにはハードルが高いと感じる。見ると気持ちが沈んでしまい、引きずってしまうことが分かっているため、自ら進んで見ることはないと思う…②」

鑑賞後、筆者は、この映画が第二次世界大戦を描いた戦争映画の中でもっともヒットした映画であること、アカデミー賞において5部門で受賞していることに触れた。そして監督のスピルバーグがアメリカ退役軍人会から「ノルマンディー魂」賞を贈られ、さらに合衆国陸軍から「公益に奉仕した最高の市民」として表彰されたことを伝えた。いつでも戦争が可能な最強の軍隊を保持し、それを支える国防総省や退役軍人省、そして在郷軍人会などの組織が存在する合衆国社会を背景としてこの映画は制作されている。映画鑑賞後の討論で生徒たちと作品の背景にある「戦争文化」を掘り下げることが出来なかったのが残念だった。「すぐれた戦争映画とは、すぐれた反戦映画であるべき」という考えについて生徒に議論をさせたかった。

4. 3 学期（第10回～第13回）

（1）第10回（1月20日／15人出席）…第2回 読書紹介

今回の読書紹介も、第1回目と同様の形態とした。第1回目の後、少数の生徒が個人テーマを変更した（各生徒の個人研究テーマと紹介図書の一覧は[参考資料2]を参照）。

（2）第11回（2月3日／14人出席）…戦争に関するいくつかの簡単な講義

今回の授業は、生徒たちに次回の講座内発表の準備をさせる必要もあったので、最初の40分ほどを、ミニ講義と題して「正戦論」・「開戦の要因」・「終戦の判断」の3点に関する話をした。簡潔にまとめておく。

I) 正戦論について

- ・正戦……簡単に言えば「正しい戦争。やむを得ず、許される戦争」のことを指す。現代の日本では一般的に「どのような戦争も悪」とみなされているが、海外では必ずしもそうではない。
- ・正戦の2つの条件
 - 1つめが「戦争への正義」…開戦の正当性で6項目ある。①正当な理由（cf：明白な侵略行為を防ぐこと）②正当な権威（cf：政治団体等ではなく、当事国の正当な政府が正当な手続きで開戦を決定すること）③比例性（結果として得られる善が戦争という手段の悪にまさること）④最終手段（戦争以外の解決手段がないこと）⑤成功への合理的見込み（戦争による勝利が見込まれ、それによって問題が解決する道筋が明確なこと）⑥動機の正しさ（cf：自国の利益増大が戦争の直接の目的ではないこと）。
 - 2つめが「戦争における正義」…戦闘行為の正当性で2項目ある。①区別の原則（戦闘員＝兵士と非戦闘員＝民間人とを区別し、非戦闘員に危害を加えないこと…いわゆる戦争犯罪を犯さないこと）②比例性の原則（なされた不正を正すのに必要以上の力を行行使しないこと）。
- ・正戦と聖戦の相違……正戦論はできるだけ戦争を限定することにより、戦争の害悪を少なくしようとする理論であるが、聖戦（宗教戦争）は非限定戦争になる危険性が高い。
- ・正戦論の現在……現実の世界では、正戦論が戦争の正当化に誤用・利用されている事態がある。また正戦論は「平和」よりも「正義」を優先させるために戦争が長期化（犠牲が増加）するという批判、さらに目的と手段を正当化することで戦争を肯定しているのに過ぎないという考えもある。

II) 戦争が始まる要因

- ・情報の非対称性（不確実性）……相手国に対する誤解が戦争を生む cf：日露戦争
- ・コミットメント問題……自国への過信と相手国への不信が戦争を生む cf：アジア・太平洋戦争
- ・価値の不可分性（争点の非分割性）……ある信念の追求が戦争を生む cf：第二次世界大戦の独ソ戦

III) 戦争終結の判断

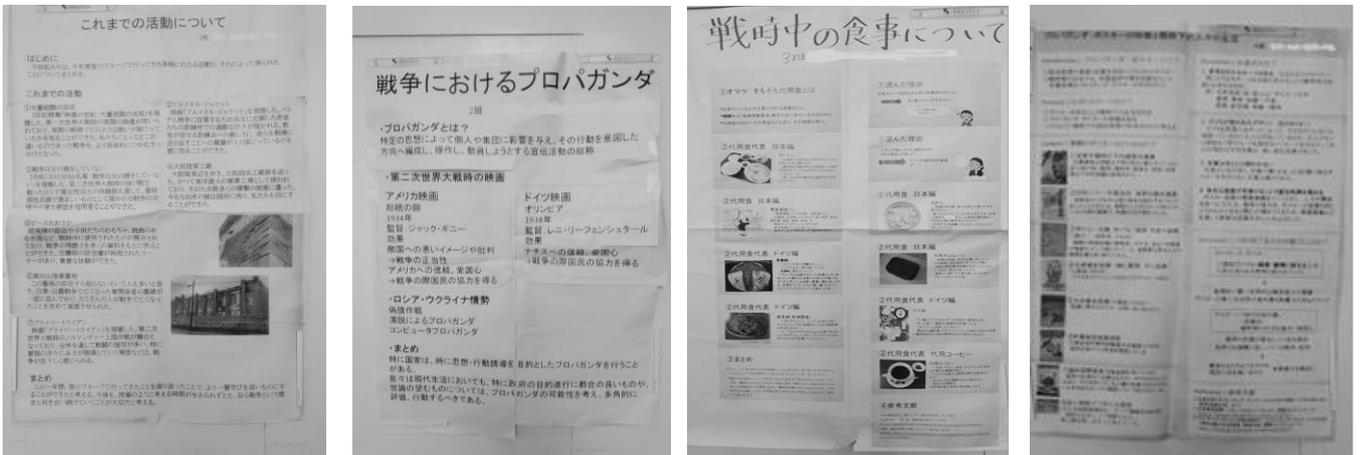
- ・紛争原因の根本的解決を目ざす場合……妥協的な和平は拒否される
- ・現在の多大な犠牲を回避する場合……将来に予想される危険はいったん保留される

（3）その後

第12回（2月24日／14人出席）は、講座内発表であった。講座内発表の報告時間は通常8分前後だが、内容の充実した発表をして欲しかったので報告時間は各班15分とした。生徒には、班員の個人研究のなかで受講者全員に聞いてほしいテーマ、あるいはまったく新しいテーマの発表でも構わないと伝えていた。

当日はすべての班がパワーポイントを用い、班員が交代で説明をした。報告テーマは、1班が「これまでの活動について」、2班が「プロパガンダと戦争」、3班が「戦時中の食事～様々な代用食品について～」、4班が「プロパガンダ・ポスターの特徴と戦時下の人々の生活」であった。1班は笹川講座の概観であった。3班は「ピース大阪」の展示に刺激を受けたもので、班員の個人研究とは異なるテーマであった。2班と4班は似たテーマではあったが、両者とも個人研究をベースに、しっかりとまとめられていた^(註14)。

第13回（3月15日／16人出席）は、「総合プルーフ」の全体報告会であり、他の6つの講座の報告と併せて行なわれた。ふつう講座内発表が口頭発表の場合、全体報告会ではその講座内の1つの班が代表発表をすることになっていたが、笹川講座ではポスター発表という形態で4班すべてに報告をしてもらうことにした。ポスター発表の制限時間は8分である。講座内発表の報告原稿を大幅に刈り込み、また新しくポスターを作成するなど二度手間のようなところもあったが、生徒たちは頑張って全体報告会に臨んでくれた。下図は、左から順に1～4班の発表時のポスターである。



5. 生徒の評価

2月3日の授業後、これまでの授業についてアンケートを実施した（16人中14人が回答）。

- ①第1次世界大戦について知る…NHK特集「映像の世紀・第2集『大量殺戮の完成』」の視聴
- ②戦争をめぐる討論&個人テーマの決定 …「映像の世紀・第2集『大量殺戮の完成』」に関する討論
- ③軍隊について知る／考える…映画「フルメタル・ジャケット」の前半の鑑賞と解説
- ④女性兵士について知る／考える…NHK・100分de名著「戦争は女の顔をしていない」の視聴と討論
- ⑤第1回 読書紹介 質疑応答
- ⑥第1回 巡検 大阪陸軍工廠関連の戦跡巡り
- ⑦第2回 巡検 ピースおおさか大阪国際平和センター見学
- ⑧第3回 巡検 真田山陸軍基地の見学
- ⑨戦争映画を見る／戦争映画を考える…映画「プライベート・ライアン」の鑑賞
- ⑩第2回 読書紹介 質疑応答
- ⑪戦争に関する簡単な講義（正戦論・開戦の要因・終戦の判断）

項目A：上記①～⑪から、よかった活動があれば、最大3つまでを選び、その理由を書いてください。

①：2人 ②：1人 ③：2人 ④：7人 ⑥：5人 ⑦：4人 ⑧：2人 ⑨：8人
最大選択可能数42件に対し選択数が31件(2.2件/人)だった。評価者がもっとも多かったのが⑨であっ

た。「非常にグロテスクだったが、戦場の生々しい様子がよく分かった」／「自分からは見る機会のなかった映画だと思うので」といった意見が多かった。次点が④で、「賛否両論ふくめていろいろ考えさせられたから」／「世界には女性兵士がいたこと、そして差別などに苦しんでいたことが、実際に経験した人の言葉から知れたから」などのコメントがあった。そして3番目が集まったのが⑥であった。「訪れたことのある大阪城公園の新たな一面を知り、戦争の痕跡は意外と身近にあること、それがあまり多くの人に認識されていないことを知ったから」。結果としては、映画・討論・巡検とさまざまな活動が上位に入った。

項目B：上記①～⑪から、よくなかった活動があれば、最大3つまでを選び、その理由を書いてください。

③：3人 ⑤：1人 ⑥：1人 ⑦：1人 ⑧：2人 ⑨：4人 ⑩：2人

最大選択可能数42件に対し選択数が14件（1件/人）だった。項目Aでもっとも評価された⑨が、一方ではもっとも評価が低かった。評価の分かれる映画だったようである。コメントは「内容はとても素晴らしかったが、戦闘シーンがグロすぎて、トラウマになった」／「あまりにも時間が長すぎたことと、鑑賞後の振り返りや議論がなかったから」である。次点の③は「グロかったので」／「後半が見れなかったので」。⑧は「お墓が嫌だった」、⑩は「準備時間が少なく、自分自身がうまく出来なかったから」など。

項目C：「戦争について私たちが知っている二、三の事柄」という講座名について、最初はどのような印象をもちましたか？ また現在はどうですか？ 記して下さい。

かつて私は「戦争を知らぬ教師と戦争を知らぬ生徒が語る世界史」という歌を詠んだことがある。高校生から見れば祖父の世代に近い筆者でも、終戦から15年後の生まれである。書物や映像から知識を得たり、上の世代の体験を聞いたりしてきたが、「戦争を知っている」とは言えない。にもかかわらず、歴史教師という立場上、訳知り顔で戦争について語ってきた。自虐と自戒の意味をこめてつけた講座名は、ジャン＝リュック・ゴダール監督の映画「彼女について私が知っている二、三の事柄」（1966年）の題名に困っている。生徒のコメントは「この講座を通じて、私は戦争について本当に少ししか知らなかったということを知ることができた良い講座名だなと思っている」という主旨のものが多かった。

項目D：授業形態について

i. 個人研究の関連図書を自分で選び、読んでまとめるのは困難だった

⑤：4人 ④：5人 ③：3人 ②：2人 ①：0人 ★：0人 …平均：3.8

ii. 個人研究の関連図書を自分で選び、読んでまとめるのは有意義だった

⑤：2人 ④：10人 ③：2人 ②：0人 ①：0人 ★：0人 …平均：4

生徒のコメントは「このような課題がなければ、自ら読むことはなかったと思うので、良い機会だった…③-④」という主旨のものが大半だった。他には「複数の本を読んだことで個人テーマを掘り下げるのに役立つ…④-⑤」／「与えられた文章の中の主旨は何なのか考える力もついた…③-④」など。

iii. 予告されていたとはいえ、授業終了時刻が遅く、困っていた

⑤：4人 ④：6人 ③：2人 ②：1人 ①：1人 ★：0人 …平均：3.8

「正直にいうと、この後に習い事があるので、もう少し早く終わってくれればなどは思っていましたがおもしろかったです…④」／「確かにそれはあるが、決して無駄な時間ではなかった…④」／「終了時刻が読めないで、まあ困っていました。せめていつ終わるか分かれば…④」など。

iv. 予告されていたとはいえ、毎回レポート等を書くのが困難だった

⑤：4人 ④：6人 ③：0人 ②：3人 ①：0人 ★：1人 …平均3.6

「初めは大変だったが、慣れてくると早く書けるようになった…④」／「何回かサボってしまったり、全然クラスルームを見ていなかったの、それは反省していますが、大変でした…④」／「後から書くことで思い出す作業になるだけでなく、その時には感じなかったことや考えが浮かぶことが多くあって良かった…④」／「帰宅後に書こうと思って忘れてしまうので、授業中のコメントシートの方が好きです…⑤」など。書くことに抵抗感のある生徒と書くのが苦にならない生徒の差が大きいと思った。

v. 映像視聴・発表・討論・巡検（施設見学等）・講義など多様な活動をしましたが、他に「このような活動をしたかった！」ということがあれば、少し具体的に書いてください。

「映画をもう少し見たかった」／「戦時中の食事を再現し食べたかった」という生徒がいた。多様な活動に生徒は満足していたと思うが、「(食事を)作る」というのは(女子)生徒ならではの発想だと思った。

項目E：授業を通じて、戦争に対する考え方が変化した

⑤：4人 ④：7人 ③：1人 ②：1人 ①：0人 ★：1人 …平均：3.8

「知識が増えたことにより、様々な視点から考えることができるようになった…⑤」／「善悪を判断できるようにはなりませんでしたが、思っていたよりも多様な側面があるということがわかりました…④」／「いままでは「怖い」「かわいそう」といった感想しかなかったけど、授業を通じてもっと深く広く考えを持てるようになったと思います…④」／「この授業では、毎回異なる面から戦争を知っていったが、戦争は絶対にだめだという考えに変化はなかった…②」／「戦争は多くの被害しか出さなかったという考えが変わり、戦争が善なのか悪なのか分からなくなった。まあ善ではないだろうが…⑤」など。

項目F：全体を通して、笹川講座に参加して有意義だった

⑤：10人 ④：4人 ③：0人 ②：0人 ①：0人 ★：0人 …平均4.7

「様々な活動ができてとても有意義だった…⑤」／「楽しかった第一希望に落ち、第二のこっちに回って本当に良かった…⑤」／「やる事の量はとても多いが、教養として身につけておきたい内容であった…⑤」など。

項目G：今後も「戦争・平和」に関する学習や活動に関わっていきたい

⑤：3人 ④：7人 ③：1人 ②：2人 ①：1人 ★：0人 …平均3.6

「平和活動などはこの歳だし、そこまでの行動力があるか分かりませんが、学習はしていきたいと思う…④」／「3年で世界史を取らないので歴史を学ぶことは無くなると思う…①」／「ちょっと自分には重すぎた…②」／「政治や思想の方に興味を持ったので、戦争や平和については一要素であるという見方でいたい…②」／「興味はあるが優先順位的にあまり関われないと思う…③」／「どうすれば戦争はなくなるのだろうと考えるだけでもしていきたい…④」／「これまで戦争に無知だった私も少しだけ勉強できたところがあるので。もっと知りたいことや深めたいこと、特に原爆については、もっと勉強したい…⑤」／「いくら学んでも終わりが無い分野のように感じますが、だからこそ学びたいと思います…④」／「自分の考えの発信や提言の多くは、そこまで影響力はないが、自分の思考力やものの見方を鍛えられるので学習に関わっていこうと思う…④」など。積極的な行動にまでは至らないが、意識はしていきたいというところか。

項目H：後輩にむけて、あなた流に、この講座のガイダンスをしてください（長所・短所もふくめて）。

「戦争をテーマに様々な活動を行ないます。自分の知識量が増え、世界が広がること間違いなしです！終了時刻を気にしない方はぜひ受講してみてくださいは!!」／「資料をたくさん使った世界史の授業の延長という感じ。生徒への要求が高いがホットなスタディーという訳」／「戦争に興味のない人は絶対に入るべきではありません。ですが学習はとても有意義なものですし、何よりも歴史についての考え方が少し変わると思います」／「研究というよりは戦場の様子を知ることができるものだと思います」／「戦争に関する話なんて怖いし、戦争は嫌いだから知りたくもないという人にぜひ取ってもらいたい。避けているだけではだめで、知って考えることで戦争がどういうものなのかを少し掴めると思う」など。

6. おわりに

アメリカ合衆国の高校生と平和について話し合うならば、彼らの背景にある「戦争文化」を日本の高校生もある程度理解しておかないと、真に対等で有意義な対話などできないのではないかと、「ピースプロジェクト」で感じた筆者の違和感が、今回の平和学習のきっかけであった。一連の学習が、当初の目的をどの程度達成したのか定かではないが、生徒たちにはおおむね好評であった。その要因をいくつか挙げてみたい。

①受講者が、第一希望者と第二希望者で構成されていたこと一希望順位の高い講座に配属されたというのはやはり大きな点であった。また男女の人数がほぼ同じだったのも重要だった。

- ②戦争についてほとんど知らない（また過激な軍事オタクでもない）生徒たちには、毎回の授業で得た知識や体験が新鮮だったこと―教科書に載っていないことを扱ったことも重要だった。
- ③映像の視聴と意見交換・巡検・読書とその書物の紹介など、学習活動が多様だったこと―「見る・歩く・読む」ことに、「語る・聴く・書く」ことを重ね合わせた活動がうまく機能した。
- ④生徒の研究を尊重する一方で、グループ単位での活動も重視したこと―③とも関連して、生徒たちは自由度の高い活動が保証されていると感じ、学習に積極的に取り組んだようである。

一方で、今後の課題も明らかになった。

- ①一回あたり授業時間が110分以内では到底収まらないこと―「5時頃までの時間拘束に対応できること」と受講条件は明示してあるが、放課後に諸活動を予定している生徒にどう対処するか。
- ②毎年、授業回数・授業日時が安定しないので緻密な年間計画が立案できないこと―2021年度は当初15回の予定が13回（講座での学習活動としては実質11回）となった。今回の講座はまったくの手探り状態で始めたが、陸軍墓地の事前学習や映画鑑賞後の振り返りなどをする時間があればさらに良かった。
- ③担当教員がもっと研鑽を積み、様々なプログラムを企画できるようにすること―今回の「総合ブルーフ」で、いちばん学んだのは、おそらく筆者自身である。

長時間の活動、数多くのレポート作成など、生徒には負担をしいたが、結果としてはそれに見合う学習内容だったと生徒たち自身が納得してくれたようである。最後は生徒たちのコメントを引用しておく。

- …知らないことも知れたし、友人の発表で意見も聞け、レポートで自分の考えを整理することも、見学で知らない場所に行くこともできたので、とても有意義だったと感じています。
- …時間も延長するし、グロいけど終わった後の学びはすごいです。

註

1. 乾まどか他「ピースプロジェクトーヒロシマを巡る日米高校生の対話―」『大阪教育大学紀要 人文社会科学・自然科学』（第69巻・2021年）p.244。
2. 実際の活動場所は、物理講義室・新館S2以外に地学教室、学園ホール2階会議室など活動内容に合わせて変更した。
3. 「総合ブルーフ」の授業は、原則として「2時間連続(110分)の授業を隔週」で行なうことになっている。多くの場合、6～7限目（14：30～16：20）が当てられるが、実際には時間内で終わらない授業も少なからずある。また学習費に関しては、生徒1人あたり1,000円程度の補助が認められており、たとえば博物館の入館料にあてることができる。
4. 「大量殺戮の完成」（NHK特集・映像の世紀・第2集）NHKエンタープライズ2005年発行・販売のDVD。
5. 当日配布した〔参考資料1〕は、世界史の授業で視聴時に利用していたワークシートを改めたものである。具体的には、質問数を大幅に増やし、かつその大半に答を付した。質問項目は映像を視聴する際のポイントだが、答を書くことに気をとられて肝心の映像を見逃してしまう生徒も少なくない。そこで逆に答を付して、見て欲しいポイントに注目させることにしたのである。ただし下線を付したQ4・16・24・27・29・38・40は、生徒たちに深く考えてもらうための「正解のない質問」とした。実物はA4判4枚だが、本稿では体裁を変えて2枚に圧縮した。
6. 事後課題は、すべてグーグルクラスルームで提示した。各回まちまちだった体裁等を本稿では可能な限り統一した。
7. 本稿に引用した生徒の感想文・コメントは本人が特定されないように、また題意を損なわない範囲で文言を改めている。
8. 「フルメタル・ジャケット」ワーナー・ホーム・ビデオ2001年発売のDVD。
9. 次のような指標を用いた。⑤（非常にそうである）-④-③（ふつう）-②-①（まったくそうではない）/★（その他）
10. 各回のサブタイトルは「第1回 証言文学という「かたち」」「第2回 ジェンダーと戦争」「第3回 時代に翻弄された人々」「第4回 「感情の歴史」を描く」である。
11. 個人研究テーマと読書紹介2回分のリストは〔参考資料2〕に示した。
12. 巡検の実施に関しては、平和のための大阪の戦争展実行委員会・日本機関紙協会大阪本部『大阪戦争遺跡 歴史ガイドマップ』（2001年・日本機関紙出版センター）と森田敏彦『大阪 戦争モノ語り―街かどの「戦跡」をたずねて―』（2015年・清風堂書店）から得るところが多かった。
13. 「プライベート・ライアン」パラマウントホームエンターテインメントジャパン発売のDVD。
14. 『「総合ブルーフ」研究報告書 2021年度版』（大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎）pp.23-31を参照。

Two or Three Things We Know About War

— Peace Learning in Integrated Proof II —

SASAGAWA Hiroshi

Abstract: In the 2021 school year, I conducted a year-long class on learning about/thinking about war in my integrated studies course. After seeing our students participating in the "Peace Project," an activity undertaken by our school and our sister school, ASMSA, I decided that to debate with ASMSA students on equal terms, it was important for them to know real information and ideas about war and the military, which are not included in Japanese history textbooks.

The class activities included watching videos about the war (TV documentaries and educational programs), watching war movies, touring war sites in Osaka City, visiting the Peace Museum (Peace Osaka in Osaka City), and reading and introducing books according to interests of each student. As a result, the process led to a variety of learning activities that combined "seeing, walking, and reading" with "talking, listening, and writing" activities. In addition, the individual research of each student was reflected in the group activities and feedback was provided. These factors led to students being satisfied that they were guaranteed a high degree of freedom in their activities, and they showed positive attitudes toward them.

The students' evaluation of the class at the end of the year was 4.7 out of 5. "I would like to encourage people who are afraid to talk about war and don't want to know about war to choose this class. I think that by knowing and thinking about it, you can grasp a little bit of what war is all about." Another student commented that the course title, "Two or Three Things We Know About War," made me realize how little I really knew about war.

Through this series of lessons, the author has confirmed that students can learn about the various facets of war by learning about war in different ways.

Key Words: tour of war sites in Osaka, classroom practice, war, war movies, Integrated Learning, reading introduction, peace study